

吉田健一におけるヨーロッパと日本の近代

土川 信男

はじめに

吉田健一は吉田茂の長男である。健一の母方の祖父は牧野伸顕、牧野の実父は大久保利通というように政治家の家系に生まれたが（健一の甥は麻生太郎である）、吉田は「文士」となった（吉田には、次のような小文がある。「文士」<吉田健一『乞食王子』講談社文芸文庫、1995年、所収>、「文士の発言」および「文士稼業」<吉田健一『日本に就て』ちくま学芸文庫、2011年、所収>）。吉田自身は文学者や作家という名称を好まなかったと思われるが（作家については、たとえば吉田健一『絵空ごと』<講談社文芸文庫、1991年>121頁、160頁）、その活動はフランス文学の翻訳者、英文学者、批評家、小説家等と多方面にわたり、酒や食べ物に関するエッセーでも知られた。

吉田の業績について、文学の分野では多くの研究がなされてきたであろう。政治学の分野では、日本政治思想史の観点から吉田を取り上げた研究として、次の著作がある。荻部直「語りの時間——牧野伸顕『回顧録』と吉田健一」、同『『閑節が外れてゐる時代』——吉田健一『日本に就て』解説』（いずれも同『秩序の夢』<筑摩書房、2013年>所収）、同『『維新革命』への道』（新潮選書、2017年）第7章。近代日本政治史を専攻する筆者に、そこに何かを付け加える能力はない（後述するように、人間の活動の専門化・細分化に吉田は反対したであろうが）。しかし吉田の著作からは、ヨーロッパの、そして日本の近代について独特の見方がうかがわれ、筆者はその点に興味を覚える。

吉田のいう近代は、普通にいわれる近代とは

違っている。普通ヨーロッパの近代といえ、広くはルネサンスから、狭くは近世を経た後のフランス革命からの時代を指すと思われる。しかし吉田のいうヨーロッパの近代は、普通には世紀末といわれる19世紀末のことである。吉田は、ヨーロッパでは18世紀に文明が頂点に達し、19世紀にそれが失われかけた後、世紀末に文明が息を吹き返したと考える。その世紀末が吉田の近代である。吉田の近代とは、どのような内容をもつものであろうか。

また吉田は、ヨーロッパの影響力は19世紀に世界へ拡大したが、そのためにヨーロッパからヨーロッパ的なものが失われ、その後の世紀末に、ヨーロッパはヨーロッパらしさを取り戻したと考える。その経緯を検討することは、今日における世界のグローバル化について、また、そこにおける各国・各地域の個性について考える上で、示唆するところがあるであろう。

一方、日本の近代は普通、ペリー来航以来の幕末を前史として、明治維新からの時代のことであろう。しかし吉田のいう日本の近代は、昭和の初期、1930年前後の時期のことである。吉田は、江戸時代までの日本には高度な文明があったが、その文明は明治・大正期に日本がヨーロッパ化する中で見失われ、昭和初期の日本がそれを再発見したと考える。そして吉田は、昭和初期の日本の文明はヨーロッパの近代を受容したものであると考える。つまり日本は、明治・大正期にヨーロッパ化し、その後、昭和初期にそれとは別の形でヨーロッパ化したのである。このような日本の歩みを検討することは、日本が国際化する過程を考察することになるであろう。

本稿は吉田の議論を通して、日本の国際化、世界のグローバル化について考えようとするものである。吉田の著作のうち、本稿で繰り返し引用・参照するものについては次のように番号を付け、該当箇所と併せて、本文中に(①111)のように示す。①『ヨオロッパの世紀末』(岩波文庫、1994年)、②『ヨーロッパの人間』(講談社文芸文庫、1994年)、③『本当のような話』(講談社文芸文庫、1994年)、④『絵空ごと・百鬼の会』(講談社文芸文庫、1991年)、⑤『英国の近代文学』(岩波文庫、1998年)、⑥『東京の昔』(ちくま学芸文庫、2011年)。

1 吉田におけるヨーロッパの近代

吉田は『ヨーロッパの世紀末』(①)において、ヨーロッパの近代について包括的に論じている。以下では同書を中心として、吉田のその他の著作で補いながら、吉田の見方を検討したい。

1-1 中世・ルネサンス・17世紀のヨーロッパ

吉田によれば、ギリシャ・ローマの文学には「後めたさというもの」がなかったが(①10)、中世のヨーロッパではゲルマン人がキリスト教を受容し、「暗さ、あるいは一種の後めたさ」を感じるようになった(①13)。自分を監視する神の視線を意識するようになったからである。こうして自分を意識する意識、自意識が誕生し、それはその後のヨーロッパの文学に付き纏い、「殆どヨオロッパの文学を定義するもの」となった(①13)。ギリシャの悲劇作者の作品には、「ハムレットやマクベス夫人の影」が差していない(①19)。また、スパルタの詩人にとって山が夕闇に包まれるのは「余りにも明らか」であったのに対して、ゲーテにとっては、「夕闇に自分の精神も包まれてそれに反応するのでなければ山が夕闇に包まれたことにならない」(①24)。こうして「神が現れたから古代の光が翳り、翳った光が人間の内面に差して、(中略)人間の世界が輿行きを増した」(①25)。吉田は、そこにはすでに「象徴主義文

学の理論」があると述べている(①22)。

吉田によればルネサンスは、「中世紀の長い混沌を通して来てのヨオロッパの目覚め」であった(①28)。文明に先立って「精神の冒険と浪費」が必要であるが(②65)、ルネサンスはヨーロッパにそれを提供した。ダ・ヴィンチの絵では影が差していても、それは「影というものについての実験」であった。そこには「ギリシャ、ロオマを再び所有すること」で得られた「野放図な喜び」があり、そこでは「天才」が「若さというもの」と一つになっている。そして吉田は、「若さが未熟を意味しない」ことの異例さを指摘しつつ、まだそこには「ヨオロッパの成熟」はないと述べる。吉田によれば、ルネサンスに「ヨオロッパというもの、あるいはヨオロッパ的なもの」を見出すのはむずかしいのである(①28)。

そして17世紀は、「ヨオロッパがヨオロッパであることに向かっていた時代」であった(②68)。吉田は、それを可能とした条件を2つ挙げている。1つは、「列国の観念とそれが示す状況」が生じたこと(②73)、今日風にいえば、ウェストファリア体制の下で多元性を含む統一が生み出されたことである。そうした状況は精神に「刺戟」を与え、精神は「異質の事物に対して揺り動かされる」(②76)。

もう1つは、「ヨオロッパになる為に必要な安定」がヨーロッパに与えられたことであり、吉田はその点で、フランスのルイ14世の果たした「極めて大きな役割」を指摘している。たしかにルイ14世の治世を通じてフランスは「どことかと戦争をしていた」が、そのことを通じて「フランスのヨオロッパでの地位」が確立し、その下でヨーロッパは安定することになったのである(②70~71)。

1-2 18世紀のヨーロッパ

吉田は18世紀のヨーロッパで家具が優雅になったことを指摘し、優雅とは「成熟することによってのみ得られる性格」であると述べる(①28~29)。18世紀にヨーロッパは成熟し、吉田

の小説『本当のような話』の作中人物である「中川」のいう「一種の黄金時代」に達したのである(③189。以下、吉田の小説の作中人物は「『本当のような話』の中川」のように表記する)。そして吉田は、18世紀に「ヨオロッパが確実にヨオロッパになったこと」が、「その文明ということ」によって証拠立てられると述べる(①29)。どういふことであろうか。

吉田によれば、18世紀のヨーロッパでは「生活を支配する各種の条件」が安定した結果、「先代、あるいは先々代から同じ生活が続いているという意識」が生まれ、ヨオロッパ人が「自分をヨオロッパ人と見做し、ヨオロッパを自分の生活の場所と考える」ことに慣れた。そこでは、「人間というものはどういうものであり、それまでにどのようなことをしたかと言ったことに関心を持つ余裕」が生まれ、その結果、「人間の観念」と「他人も人間であるという観念」が普及し、「人間と認められるものを人間として扱う」ことが「一つの通念」となった。そして、「文明がそこに現れた」(①30～31)。

この通念が広がった結果、オーストリア継承戦争や七年戦争が戦われている間でも市井の人々は敵国を旅行することができ、戦場では「決闘する時の礼儀」が守られた(①32)。この通念は、ヨーロッパ以外の地域にも適用される。18世紀のヨーロッパでは、ヨーロッパ人が人間であるという考えが「ヨーロッパ人でないものも人間であると見ること」に発展し、「郷土愛と国際的な精神が一つになった言わば常識的な人間観」が広く受け入れられた(①31)。吉田はモンテスキューの『ペルシャ人への手紙』に触れながら、「支那で土たるものはヨオロッパでも土たるに値する」という考えが確立したと述べている(①237。この言葉は、吉田健一『昔話』＜講談社文芸文庫、2017年＞133頁では、ヴォルテールのものとして引かれている)。

18世紀のヨーロッパの文明について、吉田は様々な特徴を挙げている。遊蕩よりも遊戯の形を取り、十分に計算された快樂の追求。居心地よくしていることを望むこと。サロンでの社交。モー

ツァルトの音楽とワトーの絵画(①28～29、31～34、58～60、65～66)。筆者にとって興味深い論点を、いくつか取り上げたい。

吉田は言論の自由について、次のように論じている。ヨーロッパでは18世紀のように「言論が自由だった時代」はなかった。この時代には、「輿論による偏見の押し付けや大規模な宣伝というもの」がなかった。この時代について「検閲とか専制君主制とか」を持ち出すのは「制度とその実際の運営」を取り違えているので、弾圧を「一種の形式主義」と見做した時代に弾圧は形式的にしか行われず、ヴォルテールもルソーも彼らの思想を普及させることができた(①40～41)。

また吉田は、進歩の観念について次のように論じている。「昔には敵(かな・引用者補)はないという考え」が「人間は無限に向上して行くのだという見方」に変わったのは、「一つの歪みが修正された」という点で解放であり、19世紀のように進歩の観念が「別な形で人間を歪める」ことは、18世紀にはなかった。この世紀の知識人は「出来る範囲で現状について修正すべきものを修正すること」を目指し、したがって進歩は「漸次に行われるもの」であった。ヴォルテールにとって、君主制が「進歩に貢献するもの」であれば、貢献させておけばよかった。アメリカ独立には賛成し、フランス革命には反対したホレース・ウォルポールやバークは、「進歩主義者」であって「革命家」ではなかった(①42～44)。

理性については、次のように論じられる。吉田によれば、「一切が白紙に還元され、懐疑の対象になる」のが自由であるが、そこには「疑う上での基準」がなければならない。その基準を提供するのが「精神の正常な働き」であり、その働きが「十八世紀の理性」であった(①49)。吉田は、ヒュームについて次のように論じている。ヒュームは「数学をやる際の頭の働かせ方」で神や物質や因果関係について考え、「それまで確実とされていたことの凡て」を覆した。しかし彼は、「数学と存在がそれぞれ違った世界のものであること」を苦にせず、「温いという感覚」が実在するものかどうか解らないままに、冬の炉の火を楽し

んだ(①52、55)。

吉田によれば、ヒュームの哲学はその文章と一体をなすものであった。ヒュームの文章は、「人間がいてものを考え、その結果が他の人間に伝えられる時」のもの、「人間の声が聞える」ものであった。その点で吉田は、カントからヘーゲルを経てマルクスへと続く19世紀のヨーロッパの哲学における文体を批判し、再びヒュームのような文章が現れるのは、19世紀末にベルグソンが意識の直接与件について書くまで待たなければならなかったと論じている(①52～54)。

吉田はワトーの絵について触れながら、18世紀のヨーロッパの人々が、人間は死ぬものであり、文明は滅びるものであることを知っていたと論じている。後にヴァレリーはヨーロッパの終末について論じるが、18世紀の「終末の感情」は「人間そのものを廻るもの」であった。18世紀のヨーロッパは人間の基本的な条件を認め、それに対する慰めを求めなかった。そこには、人間は「救い難いもの」であるという「諦め」があった(①58～62)。ワトーについては、吉田『昔話』<前掲>59頁も参照)。

1-3 19世紀のヨーロッパ

吉田によれば、19世紀はヨーロッパが「未曾有の規模」で発展した時代であったが、それは同時に、各種の「ヨーロッパ的なもの」が独立・分化し、その結果、ヨーロッパがヨーロッパらしさを失った時代でもあった(①67)。そのような事態を生み出したのは、観念の独り歩き、観念へ奉仕しようとするヨーロッパ人の態度であった。そのような観点から吉田は、19世紀のヨーロッパにおける政治・科学・文学について論じている。

吉田によれば、フランス革命において自由・平等・博愛はけっして「空念仏」ではなかった(①71)。しかしやがて、憲法・代議制度・人権・民主主義等は具体的な状況を離れた抽象的な原理となり、その結果、「制度というものへの過信」が生じた。民主主義は「政治に欠かせないもの」を含むものであり、したがって「いつの時代にもど

こにでも」あるものであったが、そこから「普遍的に応用できる体系」、「普遍的な政治の形態の観念」を作り出したのは、ヨーロッパだけであった(①69)。『絵空ごと』の勘八は、「現に政治があるのにそれとは別に政治というものがあって(中略)大騒ぎしたりする」と言っている(④196)。それは普遍的であるから世界に普及したが、その結果、それを生み出したというヨーロッパの特性は失われた(①70)。

なお、各種の観念が「何か神聖なもの」に祭り上げられた結果、「当り前のことを勿体振って扱わなければならないこと」になり、19世紀は「恐ろしく窮屈なもの」になった。しかも、建前として道徳が掲げられる背後で実際には、「矛盾と背徳の余地」が生じた。こうして登場したのが欺瞞に満ちた「紳士」であり、その母体となったのが「なり上りもの」である中産階級であった(①73～76)。

そのような欺瞞がよく現れたのが、ヨーロッパによる植民地支配であった。吉田はベルギーのレオポルド2世によるコンゴ統治を例に挙げながら、ヨーロッパが植民地を搾取しながら、同時に植民地を文明化する「白人の重荷」という観念に酔うことができたことを指摘している(①80)。

そこから吉田は、19世紀のヨーロッパ人が「統一した形でものを考える精神の機能」を失っていたと述べる。このことは後に科学について論じられるときに繰り返されるが、吉田によれば、19世紀のヨーロッパでドイツが「驚異的な進出」を遂げたのは、分裂した世界でただ一つのこと集中し、それ以外のことは「感傷」や「夢物語」で包んでおくことにかけて、ドイツ人が天才的であったからである(①82)。

吉田は政治と科学とを、ともに「世界がヨーロッパに倣うことで世界に普及してヨーロッパを(中略)ヨーロッパ的でなくしたもの」に数える(①86)。また、「科学と民主主義がヨーロッパである」というのが「十九世紀のヨーロッパ人のヨーロッパ観」であり、それが世界に拡がった結果、「ヨーロッパだけでなく世界からヨーロッパというものがなくなっていた」と述べる(①

242)。ただし吉田によれば、政治そのものはヨーロッパ以前にも、ヨーロッパ以外にもあったのに対して、科学こそヨーロッパに特有の産物であった(①86)。

科学を生み出したのは、「一つの事実に基いて次の事実を求める」という「精神の働き方」であった(①87)。吉田はそのような精神の働き方を「論理」とも呼んでいる。ただし、その対象となり得るのは事実であり、「事実の典型」が物質である。こうして「物質の世界」について「無限の知識」が生み出され、それは様々な発明となって驚異的な恩恵をもたらした(①88～94)。

しかし吉田によれば、「我々の精神が普通に扱っているものの大部分」は、「事実とは呼べないもの」である。そこで、「精神の世界に属することに取り組む時」には論理だけでは足りず、「飛躍、直観、解脱など」が作用する。ところがヨーロッパ人は、上述のような精神の働き方、論理に「固執」し「執着」し、この態度で「一切のこと」に向かった。その結果、彼らは「そこに閉じ込められること」になった(①87～90)。

また論理は、「前提次第で結論も不可避免的に違って来る」ものであり、「何を前提に選ぶかでどうにでもなる」ものである(①88)。その結果、科学の「隔絶と細分化」が生じた(①90)。これに対して吉田は、「一つの事柄」は「全体に繋がるからこそ得られるもの」であると指摘し、エラスムスや幸田露伴の「学識」は「人間の世界全体に互るもの」であったと述べている(①90～91)。

こうして、アーノルドやペイターのような例外はあるものの(①101～103)、19世紀のヨーロッパ人は「物質的なものの豊富で視力が減退した人間」となった(①93)。吉田は当時の科学小説や心霊学・神智学など、科学のもたらした「滑稽と愚劣」の例を挙げている(①97～100)。ただし吉田は、科学の進歩そのものを否定するわけではない。『絵空ごと』の勘八は、「ただその進歩で首を締め付けられたいしないように気を付けさせたいればいい」と言っている(④188)。

吉田によれば、19世紀のヨーロッパの文学は

「浪漫主義」に彩られていた。吉田は、プラズの『浪漫主義の臨終』で、ロマン主義が「醜いもの、不愉快なもの」、「異常、怪奇」なもの、「病的なもの」を対象とするものとされていることを紹介し、プラズがヨーロッパの世紀末の文学も「浪漫主義のなれの果て」としていることを批判している(①105～106、108)。それでは吉田自身は、ロマン主義をどのように捉えているのだろうか。

吉田によれば、「中世紀にあった神の影」が薄れた結果、「自分というもの」が「強大な魅力」を発揮することになり、「自分というもの」の限界が掴めなくなり、「自分というもの」に病的に固執するようになったものがロマン主義である。しかも、18世紀にはあった「自意識の健全な働きを保証する精神の均衡」が破れ、「評価する尺度」が失われたために、「自分について正確であることを期する手段」がなくなった。ロマン主義の特徴は「どこかぼやけたもの」があることであり、ロマン主義の文学では、「書いているものの注意力の不足」が「読むものと同じく注意力の不足」で黙認された。悲しみや喜びも観念となり、観念を観念的に扱った結果、「何となくそういうものがある気がするだけのこと」になった(①109～114)。エリオットは、当時の詩人や小説家は考える代わりに瞑想に耽っていたと述べている(①120、123)。

1-4 世紀末のヨーロッパ

吉田は、ヨーロッパの世紀末が「病的」で、「何か弱々しくて一人前でなくて(中略)道徳よりも美を選ぶ」ようなものであるとする一般的な見方に反対し、世紀末は「健全な精神」によって19世紀のヨーロッパの「愚劣、偽善、粗雑」を「嫌悪」したものであると主張している(①127～128、131)。

吉田によれば、19世紀のヨーロッパでは言葉が「観念に奉仕すること」を強いられた(①141)。「雲を掴むようなもの」となっていた(①131)。それに対して世紀末には、「どのようなものもの

確に認めてその微妙な陰翳をその形で受け留める」ようになった(①132)。ワイルドが、「出来上った文章に適宜に内容を嵌め込む代りに、自分が語るべきことの性質を考え、それと結合する他ない言葉を探すことで言葉を完全に生かすこと」を最初に実践した(⑤14～15)。ボードレールの詩では、「言葉が観念、仕来りその他その言葉以外の何にも頼らずにそこに置かれている」(①143)。マラルメやヴァレリーにとって、「言葉を得ること」は「その分だけ世界、並に自分の存在が掴めること」であった(①163)。

吉田が「文学が言葉であること」(⑤17)、「詩が言葉であること」、「言葉が詩なのだということ」を強調し(①144～145)、また印象派の画家たちについて「画家は絵を書かなければならない」ことを強調しているのは(①151)、後述するような象徴主義の理論によるとともに、観念に寄りかからず自分の眼でものを見る態度を指しているであろう。吉田はさらに、ヨハン・シュトラウスやフランクの音楽(吉田は世紀末の音楽ではないと断りながら、ヨハン・シュトラウスの音楽に触れている。リヒャルト・シュトラウスではない)、バルグソンの哲学、ホプキンズの詩等に、世紀末を見出ししている(①183～184、186～187、201～203、218～224)。

こうして世紀末は、「認識する時代」となった(①161)。その認識は、全てに及んだ。それは「言葉で世界を蔽う」ことであり(⑤13)、世紀末の詩人たちのうちには「人間が認識し得る凡てと言ったもの」が感じられる(①163)。その認識は、現在を越えて過去にも及んだ。吉田は、世紀末のヨーロッパ人の眼には「黄昏の光」が差していたという。黄昏の光は「一日のうちで最も潤いがあるもの」であり、それは「そのまま豊富ということ」であった(①155)。吉田はプールの『失われた時を求めて』に触れながら、過去が「現在に対して遥かに大きな振りを持つもの」であり、過去があるほど「現在も豊富なものになる」と述べている(①157)。『絵空ごと』の元さんは、「精神が豊かなのはその精神の過去が豊かなのだ」と言っている(④78)。

こうしてヴァレリーは『精神の危機』において、「ヨオロッパにあるものの一切が雑然とその記憶に戻り、その偉人や優れた著作の凡てがなんの順序もなしにヨオロッパの頭に浮かんで来た」と述べ、「凡ての救世主、創始者、保護者、殉教者、英雄、国父、聖女、大詩人」、無数の思想、教義、哲学、理想、世界観、キリスト教の分派、実証主義の再生について論じることになった(①168～169)。

ヨーロッパは18世紀に文明に達したが、19世紀にはヨーロッパが世界に拡大し、その文明の特徴が「どこのものでもあるまでに一般化する傾向」を示した結果、ヨーロッパはヨーロッパらしさを見失った。しかし世紀末には、「ヨーロッパを再び獲得すること」が行われ(①149)、ヨーロッパは「そのもとの、これが十八世紀に取るに至った形」に戻った(①242)。

ヨーロッパの姿が「それまでになくっきりしたもの」となったのは(①165)、世紀末になってヨーロッパ人が観念の呪縛から脱し「再び眼が見え出した」から(①150)、「眼の働きを取り戻した」からであるが(①185)、同時に、「他人を知ること」が「自分に自分の形を取らせること」であるという「普遍性と個別的であることの関係」によるものでもあった(①237)。つまり、「或るものが全くそのものである時にそれは普遍に繋がるとともにその個性もそれだけではっきりしないではない」のであり(①57)、「人間は自分がいる所が決らなければ息をついて辺りを見廻すことが出来ない」のである(①201)。『絵空ごと』の勘八は、「実際にどこか解らない場所は妙に限定されて来る」のに対して、「明かにどこかである所にいるとそこがそこであることが念頭から消える」と言っている(④131)。つまり、19世紀に自ら世界となることによって個性を失ったヨーロッパは、世紀末に世界であることを脱して個性を回復し、同時に普遍と繋がったのである。

また吉田は、「或る英国の批評家」がボードレールについて「どこの国の言葉にも直せる彼の思想が強烈でそれだけで人を惹く」と主張したの

に対して、ボードレールの魅力は、ミュッセやラマルティエヌのようなロマン派の詩人たちの後で、「フランス語が再びフランス語の性格を取り戻して我々に呼び掛ける」ようになったことと「切り離せないもの」であると反論している（①177）。『東京の昔』の語り手は、「ヨーロッパと言ってもそれがそこのどこかでなければ場所の感じがするものでない」と言っている（⑥123）。吉田は世界とヨーロッパとの間に見出した「普遍性と個別的であることの関係」を、ヨーロッパとヨーロッパ内の各国・各地域との間にも見出したのである（①183）。

吉田は、「再び戻って来たヨオロッパ」に我々が懐かしさ、親しみを感じることを指摘している（①190）。それは、必ずしも狭い意味のヨーロッパに限られない。ヴァレリーは「我々の住処も同然である」場所として、「トラヤヌス帝治下のロオマ」、「プトレマイオス王朝下のアレクサンドリア」を挙げているが（①170）、吉田は、世紀末のヨーロッパ人が同時に「ロオマの後期の皇帝たちがいた頃のロオマ人」であり、「ギリシャも祖国の一つに持ち、ルネッサンスが身近に感じられる」のであれば、彼らにとって世紀末は「一種の帰郷」であったと述べている（①201）。

そして吉田は、ヴァレリーにとって「アントニウス系の皇帝達の治下にあったロオマ」と「アレクサンドリア時代のギリシャ」とは、「近代と比較出来る時代」であったと述べている（⑤24）。吉田によれば、ポーが「近代文学の始祖」であり（①142、⑤9）、ワイルドが「英国の近代文学の始祖」であった（⑤16）。フランスではボードレールがそれを受け取り、マラルメやラフォルグがそれを継承し、最後にヴァレリーが近代に定義を与えた（⑤9、13）。吉田においてヨーロッパの近代は、世紀末に始まったのである。

1-5 ヨーロッパにおける近代の終焉

吉田にとってヨーロッパの世紀末は、ヨーロッパが18世紀の文明へ回帰し、ヨーロッパらしさを回復した時代であったが、それは同時に危機の

時代、それも精神の危機の時代であった。

ヴァレリーの『精神の危機』は第一次世界大戦に際して書かれた。吉田によれば、ヴァレリーは「世紀末を念頭に置いて一九一四年までのヨオロッパについて語っている」のであり、その世紀末が「ヨオロッパの近代の同義語」であり、ヴァレリーにとって第一次世界大戦は「近代の総決算」であった。さらに吉田は、「近代が実質的に終わったのが第二次世界大戦が起ることによってだった」と続ける。つまり、「第一次世界大戦の後でまだかつての俤を保っていたものを第二次世界大戦が一掃した」のである（①171～172）。ヴァレリーがラフォルグやマラルメとともに立ち会ったのは、「一つの文明の終わり」であった（①152～153）。

世紀末から第二次世界大戦に至る近代に終焉をもたらしたのは、もちろん政治・経済・社会にわたる歴史の変動であったが、吉田はそれを「精神の危機」と捉えた。『本当のような話』の中川は、次のように論じている。危機とは「精神の緊張が伴う極度の自由、或はその自由から生じる緊張」である（③181）。そして、「一つの時代に亘って続いた緊張を思えば、それが去るのに際してエル・アラメーンの攻防戦、或はレニングラードの防衛、或はベルリンの壊滅の形を取ったのは驚くに当たらなかった」。むしろ、「ドイツ軍がマジノ線を突破した瞬間に危機の時代の終焉が始まっていたのかも知れなくて具体的な危険が生じれば危機は影を潜める」（③179）。

吉田自身は精神の危機を、象徴主義文学理論の意義と限界とから説明している。吉田によれば、太古の時代に人間が太陽という言葉を得たとき、その言葉で太陽が人間の世界に実在することになった。そして言葉には、「或る一つのことを通して全体を、世界を指す」という「不思議な作用」、すなわち象徴としての働きがある（①203～204）。象徴主義の詩人たちは、言葉を意識的に使うことによって、言葉を象徴として使おうとした。しかし吉田は、そのことが2つの経路を経て、精神の危機をもたらしたと考えているように思われる。

まず、精神は象徴としての言葉を通じて世界を認識しようとするが、その世界は「無限の豊富」であるとともに「混乱」でもあった。この点で吉田は、ヨーロッパの世紀末がヨーロッパの19世紀と対立するものであると同時に、19世紀の帰結でもあることを認める(①166、243)。19世紀に科学を生んだ精神が「凡てのもの」の秩序を「論理的に」追究した結果、「個々の世界が各自の方向に従って分離する」こととなり、結局、精神が「近代の無秩序と豊富を支える」ことになった。しかし精神が混乱の全てを認識するとき、「混乱は認識するものうちにもある」ことになる(⑤9、～10、12、27)。ヴァレリーの記憶にヨーロッパの過去は「雑然と」、「なんの順序もなしに」によみがえったのである(①168)。

しかし、精神の危機をもたらしたのは、そうした混乱だけではなかった。「ヨオロッパの精神の一面」は「抽象の作用を開拓して止まない」ことである(①190)。精神が全てを認識しようとする近代において、「精神自体」も「精神の対象」になり、「精神が直接に精神を見る余地」が生じ、意識する意識を意識する「自意識」が生じた。その自意識が徹底した結果、「精神を凡てのものから孤立させる」ことになった(⑤11～12)。吉田は、「精神の世界は内面に向って無限に拡って(中略)世紀末のヨオロッパ人の精神はそこに閉じ込められていた」と述べている(①207)。こうした2つの経路を経て、ドガのような世紀末のヨオロッパ人は「倦怠」に苛まれることになった(①207～209)。こうしてヨオロッパは精神の危機の時代、すなわち近代の終焉の時代を迎えたのである。

本稿ではヨーロッパの現代について触れる余裕はないが、おそらく吉田は第二次世界大戦後の現代を、抽象化の極限において世界から孤絶するに至った自意識が世界とのつながりを回復する時代と捉えたものと思われる。吉田は、「凡ての方面に分析を進めて行って中心が空虚になった時に、そこをもう一度、人間というものが占める」、「自分が人間であることを再び認める方に人間は引き戻される」、「我々は現代という人間再建の時代に

向かいつつある」と述べている(⑤42～43)。吉田の晩年において重要な意味をもつことになる「時間」は、自意識と世界とが結び、人間が回復される状況を指すものではないかと思われる(吉田健一『時間』講談社文芸文庫、1998年)。

2 吉田における日本の近代

吉田は『ヨオロッパの世紀末』(①)や『英国の近代文学』(⑤)などの評論において、日本の近代について断片的に触れているが、それについて体系的に論じた著作を残していない。以下ではそれらの評論に加えて、『本当のような話』(③)、『絵空ごと・百鬼の会』(④)、『東京の昔』(⑥)等の吉田の小説から、作者の考えを代弁していると思われる作中人物の言葉を拾い集めて、吉田の見方を再構成してみたい。なお、吉田は1931(昭和6)年にイギリスのケンブリッジ大学への留学を途中で終わらせて帰国し、河上徹太郎や中村光夫らと交流しながら文学修行の日々を過ごした。そのことから吉田の昭和初期に関する記述は、その時代を生きた人間の証言ということもできるであろう。

2-1 江戸時代までの日本

吉田は、ヨーロッパが文明に達するはるか以前から、中国や日本は高度な文明をもっていたことを指摘している(②67)。『絵空ごと』の元さんによれば、日本の歴史は「古くて複雑」なのである(④77)。

吉田はそのような日本に生まれたものとして、「源氏物語」以下の日本文学、「見事な甲冑」、浮世絵等を挙げている(①174～175、177)。

日本では、独特の人間関係も生まれた。『本当のような話』の中川は、「歌を送ったり返したりしていた頃」を懐かしむ(③173)。吉田は森鴎外の『雁』に触れながら、昔からの「人付き合い」という「社交」が明治の「料理屋の座敷」という「サロン」につながったことを指摘している(①56～57)。

東洋では、西洋と異なる時間の捉え方が生まれた。『絵空ごと』の元さんは、西洋の詩人が「時間が命を食う」と謳ったのに対して、東洋では「悠然と山を眺めたりする」と言う(④146)。日本では、独特の死生観も生まれた。同じく『絵空ごと』の勘八は「生きているのが楽しければ死ぬなんて偉なことじゃないことになる」と言い(④177)、『東京の昔』の川本さんは「来世のことを思えば思う程今の時間は今になる」と言う(⑥224)。ここから、無常を見つめながら、その「果敢なさ」ゆえに(①59)、生をいとおしむ感性が生まれるのであろうか(「果敢なさ」、「無常」については吉田『昔話』<前掲>58頁も参照)。

東洋と西洋との違いは、論理の進め方にも現れる。『絵空ごと』の元さんは、「何も西と東で論理が違うことはない」と断った上で、次のように論じる。「ただ古いというだけで東洋の方がずっともっと論理の運び方が細かですよ。それを西洋と比べれば神速とも言えますか」。そして元さんは、「西洋風に馬鹿正直に野暮ったく論理を進めて行く」のでは「我々の血が承知しません」と言い、「それを歴史と言ひ直してもいい。或は文明とも」と続ける(④79)。

吉田は、これらの文物・感性・論理が歴史と伝統とによって育まれたものであることを強調している。『絵空ごと』の勘八は、「工夫するには時間が掛かり、それが通り一遍の工夫では足りなければ人間の何代にも亘る工夫が必要になって、これが例えば自在鉤や炉や二月堂の形を取った」と言う(④75)。勘八はまた、鵑外の史伝を念頭に置いて「洪江五百や井沢益が何と呼ばれていたのだろうか」と自問し、「もしそれが御内儀だったならばその名称には伝統もあり社会もあって歴史がその背後に控えていた」と自答する(④151)。ちなみに吉田は、洪江抽斎や伊沢蘭軒を取り上げた鵑外の史伝にしばしば触れている(たとえば蘭軒について、吉田『昔話』<前掲>11～15頁。なお抽斎について、三谷太一郎『『洪江抽斎』の文化史的観点』<同『人は時代といかに向き合うか』東京大学出版会、2014年、所収>を参照)。

したがって、ヨーロッパが18世紀に文明に達

したとき、ヨーロッパは「江戸の文明の爛熟期」に追いついたといえるかもしれない(①209)。吉田はこの頃、ヨーロッパから「康熙帝の清朝」へ、そして「享保から文化に至る日本」へと「文明の一带」が廻らされていたと述べている(②91)。

そして吉田は、世紀末のヨーロッパの「近代」について論じながら、近代とは「ヨオロッパだけのもの」ではなく(①244)、「或る普遍的な状態」を指すものであると述べている(①174)。実際、吉田によれば「我々は(中略)支那と日本に容易に近代を見出す」(①173)。近代は日本と中国では「数百年、また見方によっては千年も続いて来た状態」であり(①243)、「近代は日本や支那で一つの常態になっている」のである(①173)。

その日本が、ペリー来航を契機としてヨーロッパと接触することになった。そのヨーロッパは19世紀のヨーロッパであり(①73、125)、そこには「十九世紀のヨオロッパの威圧」があった(①209)。いわゆる西洋の衝撃である。そして日本は、「外部に対するヨオロッパの武器だった科学と政治」が、「その外部がヨオロッパから学べるもの」であることを見抜いた。そのことによって日本は、「東洋でヨオロッパの衝撃を受け留めた唯一の国」となった(①239)。『絵空ごと』の勘八は、「我々は強いものに靡くんじゃなくてその強いものの線で行ってもっと強くなるうっていうようなところがある」と言う(④123)。こうして日本は、文明開化・自由民権・富国強兵・社会主義・デモクラシー・共産党・八紘一宇・民主主義・・・に次々と励むことになった(④81)。

2-2 明治期の日本

吉田は、江戸時代まで続いてきた日本の文明が、明治以降のヨーロッパ化で大きく揺らいだことを認めている。『絵空ごと』の元さんは「明治以来の騒ぎ」と言い(④103)、『東京の昔』の川本さんは、明治で「凡て一応は御破産に」なったと言う(⑥114)。

『絵空ごと』の勘八は、「東京は壊しに壊して

来た」と言う(④129)。『本当のような話』の民子によれば、東京は「明治以後に一切の計画を抜きにして出来上った町」で、そこでは「見事な武家屋敷、大名屋敷」が壊されて、「赤煉瓦の建物」が並んだ(③56)。

また民子によれば、明治にできた華族制度は「肩書がなくても貴族と言える人間」と「肩書が何よりの財産である種類のなり上りもの」との「ごた混ぜ」であった(③28)。

『絵空ごと』の元さんや勘八は、洋服で座敷に座る居心地の悪さに触れる(④24、117)。勘八はさらに、日本の宴会から「前にあった何か」がなくなった結果が、明治以降の宴会になったと言う(④164)。

しかし吉田は、明治期のヨーロッパ化に対しては好意的である。一つには、それが日本の存続という必要に迫られたものであったからである。吉田は、「曾ての日本の知識階級」にとって「外国の事情を理解し、外国の学問を身に付けることが具体的に、多くの場合は切実に必要であった」と述べている(吉田『日本に就て』<前掲>126～127頁)。『絵空ごと』の勘八は、イギリス人の友人であるウィルコックスが、明治に日本に来た西洋人のもったいぶった様子を滑稽さとして揶揄したのに対して、「その後に大砲が並んでいたことを忘れちゃいけないよ」と注意する(④178)。『東京の昔』の語り手は、「実用的な方のことを急がなければ国は亡びるのだった」と言う(⑥138)。しかし吉田が明治の日本のヨーロッパ化に好意的なのは、その切迫した必要性のためだけではない。

先述したように18世紀に文明に達したヨーロッパでは、「人間と認められるものを人間として扱う」ことが「一つの通念」となった(①30～31)。そして吉田は、かつてスペインの騎兵を「半人半馬の怪物」と見たメキシコ人や、ヨーロッパ人を「洋鬼」と呼んだ清末の中国人とは違い、幕末の日本人がヨーロッパ人を「正当にヨーロッパ人の姿をしたもの」と認めたことを指摘している(①238)。明治の日本人はヨーロッパの人間を、同じ人間として受け入れたのである。

それが可能であったのは、日本人がヨーロッパの影響を、江戸時代までの文明に依拠して受け入れたからであろう。その文明は大きく揺らいでいたが、「我々自身の生活感情に深く根を降している」ものであった(①243)。

この点に関連して、吉田はトインビーを取り上げている。吉田は、「技術だけを学んで(中略)それ以外の影響を受けずにいられるものでない」とする点でトインビーに同意している。しかし吉田によれば、トインビーは「不思議な考え方をする歴史家」で、「何故か人間の精神の内奥で営まれる種類の行為には全く触れない」。それに対して吉田は、「導かれるままに精神が赴いて行けばそれが他の精神に変わらぬと思う」のは、「人間を本質的に何か別なものにすることが出来ると考える(中略)進歩の観念」と選ぶところはないと論じている(①240～242)。

こうして明治の日本人は、臆することなく本場のヨーロッパを訪れ、本物のヨーロッパを受け入れた。吉田は、「曾ての日本の知識階級」は「外国のことを知ろうと努めて、知った上は外国人と対等の立場でものを考えた」と述べている(吉田『日本に就て』<前掲>126～127頁)。『東京の昔』の語り手は、次のように言う。「西園寺さんがパリでそんなことを考えていたんですかね、自分は今異国にいるなんていうことを」。ここで触れられているのはヴェルサイユ講和会議に出席した西園寺公望ではなく、フランスに遊学して数年間を過ごした若き日の西園寺であろう。語り手はさらに言う。「外国に行きでも何でもして外国のことを身に付けば外国も日本もなくなる」。ちなみに、ここで語り手は西園寺と対照的な日本人として永井荷風を想起している(⑥66～67)。吉田は荷風を好まなかった(たとえば吉田健一『東西文学論・日本の現代文学』<講談社文芸文庫、1995年>97～105頁)。

また『本当のような話』の中川は、社交クラブを例に取りながら次のように語っている。明治の人間は「日本の基礎が(中略)しっかりしている状況」で外国のものを使ったので、「それを日本人が使うから日本のものになった」。そして中川

は「自分も覚えている明治の人間の風貌」を思い出すが、その明治の人間は、「東京クラブに馬車を走らせて暫くすると柳橋の亀清の座敷に和服に着換えて現れた」(③ 188～189)。ここには、吉田の祖父である牧野伸顕の姿が投影されている。ちなみに『絵空ごと』の勘八は「明治の少し増しな人間」として伊藤博文・東郷平八郎・北里柴三郎を挙げている(④ 124)。

『絵空ごと』の元さんは、明治の洋館は「日本の風土の中で日本の材料を使って建てた」ものであるから「日本の家」と言う(④ 79)。元さんはまた、次のようにも語る。「昔は大概の洋館に日本の家が付いていたもので、その片方から片方へ行って別に何が変わったとも思わなかったんだから立派なものでしたよ。(中略)本当に人間が住む為に作られたものが二つ並んでいけば様式が少し違って構わないものらしい」。その元さんに勘八は、次のように答える。「そう、大理石の炉の上に盆栽が置いてあって、それが明治というもの、或はそういう日本の洋間でそれでよかった」(④ 98)。『絵空ごと』のとき子さんは、「着物が着こなせるならば洋風の部屋での立居振舞いは易しい」というような人間である(④ 88)。こうしたことの結果、『本当のような話』の中川によれば、「明治の初期ではないにしても遅くともその中期には(中略)外国のものもどこか異国の匂いを残して日本のものになっていた」のである(③ 188)。

吉田によれば明治維新は、「既に人間の社会であるものが人間であることを失わないでいる」ための、「一時はその人間の観念を危くするまでに徹底した」手段であったが、日本は人間の観念を失いはしなかったのである(吉田『昔話』<前掲> 144頁)。

ただし吉田は、明治の日本のヨーロッパ化を全面的に肯定するわけではない。吉田は、それが実用的なものに偏り、精神的な面が軽視されたことには批判的である。『東京の昔』の語り手は次のように論じる。明治維新という「革命の域を越えた大変動」に際して、日本人が「兎も角目標を見失わずにいられた」のは、「日本が精神の面で充

足していてそれ以外の実用的なことではそうではないからそれを直ぐにも外国から取り入れる必要があるという考えがあった為」であった。しかし、「そう考えること自体」が「精神の面でも充足していなかったこと」を示すものであった。吉田は、「精神の面」が「無用」なものだとされたことを批判したのである(⑥ 138)。

2-3 大正期の日本

大正期の日本に対する吉田の評価は否定的である。『本当のような話』の中川は、「明治、大正、昭和の三代のうちで大正が日本では一種の停滞の時代だった」と言う(③ 105)。そうなった背景には、大正の日本人が明治の人間ほどには本場のヨーロッパを訪れなくなり、本物のヨーロッパを求めなくなったことがあると思われる。日清・日露戦争を経て明治の末に条約改正を達成した後の日本では、明治期にみられたようなヨーロッパ化への切迫感が失われた。

お雇い外国人教師は日本を去り、留学帰りの日本人が日本語でヨーロッパの学問を教えるようになった。『東京の昔』の語り手は、「大正の時代らしい一種の鎖國的な思いやり」について、次のように言う。「大正になって日本には何でも一応あることになり、(中略)外国のことを勉強するのに外国まで行く必要が認められなくなっていた。そういうことは凡て明治年間にしてしまったではないかというのである」(⑥ 119)。

あるいは留学する場合でも、明治期の留学は「命懸け」であったのに対して(⑥ 177)、大正期のそれは、いわば箔を付けるためのものとなった。ヨーロッパでの話を得意げにすることを、『絵空ごと』の戸塚さんやウィルコックスは「アチラ話」と呼ぶ(④ 36、127)。

西洋の建物をそのままもちこんだように間取りが広く天井が高かった明治の洋館は(④ 37)、一回り小さな大正の洋館に姿を変えた。『東京の昔』の語り手は大正の洋館について、「どこかせこましい」、「椅子や卓子が前の時代よりも一廻り小さく作られた」、「床には同じ細ごました模様の絨

毯が敷いてある」、「置物もどこか勘違いしている」と酷評する(⑥76～77)。

その結果、大正期の日本ではヨーロッパ、そして芸術その他ヨーロッパの文物は観念となった。吉田は小説の中で、大正という時代に影響されていない人物を描くことによって、逆に大正の人間の姿を浮き彫りにしている。『本当のような話』の民子は「文学の観念」に煩きかれておらず、「トーマス・マンとトルストイの小説を神棚に上げて置くという種類のこと」をしなかった(③24)。『絵空ごと』の勘八は、「ヨーロッパには文学っていうものがあるっていうことで日本ではそれが私小説になる」と言い(④48)、同じく『絵空ごと』の元さんは、「本を読むんじゃなくて文学に親むなんてことになる」と言う(④200)。

『絵空ごと』の勘八は横山大観の絵について、次のように言う。大観は「いい画家」であるが、それを「自分の家に持って来て床の間に掛けるかどうか」は「好みの問題」であり、「自分の好みに反して掛ける」とすれば、それは「嘘」である(④181)。ちなみに吉田の父である吉田茂は、大観の絵を好まなかった(吉田健一『父のこと』<中公文庫、2017年>113～114頁)。

彫刻について、勘八は次のように言う。「その芸術品とかいうものでなければその彫刻は見るに値しなくてそれがそこに立っていないことになるんですかね」。勘八はまた外国の町について、次のように言う。「先入主でこれが芸術の都だとか見て置かないと死ねないんだとか」。ちなみに勘八は、日本の「侘びや寂び」についても、それが観念と化している様子を、次のように揶揄する。「泣き出しそうになることだの生きている心地がしないことだのがその何とかいうものだっていう風になっているのは困ったものですね。(中略)それが小さな部屋に這って入ったり薄着をしてがたがた震えたりすることではなければならないってというのは困りますよ。例えば枯れ木に鳥が止っているのを見て楽しむのに心がどの位豊かなことが必要か考えたらいいんだ」(④92～93、95、97)。

『本当のような話』の民子は芸術全般について「天才という厄介な言葉」を思い、次のように問

う。「天才が作ったものに付き合うのにこっちも天才にならなければならないのか。それとも天才の前に自分は普通の人間であって畏まるのか」。しかし彼女の答えは、次のようなものである。「畏まる前にその世界に入って行けるようになって畏まることの方は確実にいい気持ちになれることに免じて忘れることを自分に許した」(③154)。

『絵空ごと』の勘八は、「芸術はいいもののだと思いたい教養気遣い」を批判する(④182)。勘八によれば、「芸術とか政治とかいう言葉」がはびこると、それに「凡てを捧げる」人間が現れるが、「そんなのを人間と呼ぶことは出来ない」(④138)。勘八の批判は、人類という観念にも向かう。「一人の人間であるならばハンバーグステーキを食べることも出来るが、「人類が食事をしているところなど想像も付かない」(④149)。

『絵空ごと』には、日本で青少年に英国風の教育を施すことを標榜する寄宿舎が登場するが、吉田はそこで、「英国の紳士なるものの観念」が生み出す喜劇を描いている(④105～119)。大正期に日本人が本場のヨーロッパを訪れることがなくなり、ヨーロッパが観念となった結果、ヨーロッパがその実体を離れて理想化されるようになったのである。『東京の昔』の語り手は、「大正になって懶けたから日本はまだまだというような言い方が出来た」と言う(⑥66～67)。

『本当のような話』の民子は「凡てを杓子定規に考える人間」、「その定規になるようなことを言うもの」、「そういう定規が欲しい人間」について語り(③148)、同じく『本当のような話』の中川は、「事件とか政治とかと称して手段を目的の上に置くのは可笑しなことだった」と言う(③200)。大正は、観念に奉仕した時代であった。

2-4 昭和初期の日本

『東京の昔』の川本さんは、明治維新から6、70年たった昭和初期の日本について、「こなれていない部分」が多すぎると繰り返す(⑥114、137、224)。同じく『東京の昔』の語り手は、次のように言う。明治以来、「随分まだ無理なこと

を我々は押し付けられている」、「日本人は猿真似が上手なんだとか工業の発達が足りないとか外国人はお行儀がよくて日本人は虚礼が好きだとか」、「それが嘘だと解る所まで行かないでただ何となくそうだと思われていることの負担っていうのも相当なものじゃなければならない」。しかし語り手は、次のように続ける。「それが嘘八百だからそのうちにはそんなことを考えないですむようになる」(⑥ 195)

実際、昭和初期の日本では新しい動きが生じていた。たとえば、日比谷から銀座あたりの街並みである。『本当のような話』の中川は、昭和初期にその地域が「俄かに何か洒落た感じがするものになった」と言う。そして中川は、当時銀座にできたコーヒーだけを飲ませる店やコロンバンという店について、「フランスのカフェの真似でなくて寧ろそこにフランスのカフェと同じものがあるというようなそういう空気だった」と回想する(③ 179～180)。

ただしそれは、銀座がフランスになったということではない。中川は先の回想に続けて、「そのフランスが銀座にあって場違いでなかった」と言う(③ 183)。なぜ「場違いでなかった」のか。『絵空ごと』の元さんは、銀座には「仕事が終わって今晚はどうして過そうとさ迷い歩くものの群」が「銀座というものが出来て以来少しずつ作り上げて来た一つの佇い」があると言う(④ 24)。『東京の昔』の語り手も銀座の喫茶店について語りながら、「あの喫茶店の裏を流れているのが江戸時代からある掘り割りであることは大事だった」、「その頃の東京は既に銀座を芽生えさせるだけの伝統を江戸から受け継いだ町だった」と言う(⑥ 52)。つまり、江戸時代の伝統を受け継ぐ日本人の明治以来の営みが、昭和初期になって日本とヨーロッパとを融合させて、新しいものを生み出しつつあったのである。

『東京の昔』の語り手は、銀座の資生堂についても語る。彼によれば資生堂の建物は、「大正時代に出来た(中略)どこか安もの感じがする」ものであったが、「すでに十年はたっていて時代が付いて目障りではなかった」(⑥ 60)。彼はま

た資生堂の別棟について、「化粧煉瓦を使った様式」による「大正期の日本でなければ建てられはしなかったもの」であるが、「それを背景に横丁の鈴懸けの並木が舗道に影を落している具合」は、「必ずしも日本と思えなくなることがあった」と言う(⑥ 123)。

『本当のような話』の中川も、「当時の資生堂の食堂」が「如何にも西洋料理屋らしい店」で、「その頃の銀座に似合っていた」ことを思い出す(③ 183)。ちなみに彼によれば、その頃の日本の西洋料理は「恐らくは世界一だった」(⑥ 181)。『絵空ごと』のウィルコックスも、これは戦後のことという設定であるが、「日本の西洋料理は世界一だよ」と言う(④ 121)。

『東京の昔』の語り手は、当時日比谷にあった帝室林野局の建物についても語る。その建物は「褐色の化粧煉瓦を使っていても既に大正の安易な様式のものでなくて(中略)一箇の建物であることが見た眼に紛れもない」ものであり、その点で「日本の建築が再び建築になり始めているのを感じさせた」。吉田において赤煉瓦は明治を、褐色の化粧煉瓦は大正を象徴するものようである。戦後になって語り手は、日比谷から丸の内の方へ歩きながら、次のように回想する。「町の感じがすることで林野局の伝統がここに受け継がれていることが解る。その伝統の形成と呼べるものにこっちは立ち会っていた」(⑥ 134)。

こうした変化は、銀座や日比谷だけにみられたものではなかった。『東京の昔』の語り手は戦後になって、「東京全体が大震災の後に出来た東京というもので今になって思い出せば世界で最も美しい町の一つだった」と回想する(⑥ 44～45)。彼は、「東京の一部をなしている外国」は「明治の時代に入って来たもの」であるが、「明治、大正と立って行くうち」に、東京と「見分けが付かない形」を取るようになったと言う(⑥ 50)。彼によれば、当時の東京が外国のようであったのは、外国と同じように、そこに「その生活様式も人生観もあった」からである(⑥ 130)。

つまり、『東京の昔』の語り手が言うように、「明治以来のごたごたに収拾の動きが生じて文明

の落ち着きを取り戻し始めたのが昭和の初期だった」(⑥ 115) のである。そこでは「何かが生まれて来ていることは間違いない」のであり、「この新しいもの」は「それまであったものの一部」に取り入れられ、それゆえに「この推移には脈を打つものがあつた」(⑥ 133～134)。

なお、『本当のような話』の民子は戦後になって、「明治になって西洋風の庭の作り方が日本に入つて来てから出来た庭」でも、「その台付きの石盤は今はそこになければならなかつた」と言う(③ 17)。同じく『本当のような話』の中川も戦後になって、日本でビアホールが蕎麦屋や小料理屋よりもずっと後に登場したにもかかわらず、「漸次に板に付いて来て(中略)不調和を感じさせない」ことに気づき(③ 83～84)、「曾ての寿司屋や蕎麦屋に相当する洋食の店(中略)が時間がたつうちには出来て来るのではないか」と期待し(③ 185)、西洋から移入された社交クラブが「曾ての日本人にとっての蕎麦屋」と同じものになっていると考える(③ 188)。戦後になって民子や中川がそのように考えるのも、昭和初期に日本とヨーロッパとの融合が起こつた結果なのではないかと思われる。

ちなみに『絵空ごと』の勘八によれば、昭和初期に「極く普通のものに思われていたピヤホールの作り」は、「広くて窓も大きく取つてある割に卓子が詰め込めるだけ詰め込むという具合に並べてない」というもので、「その方が飲んでいて気持がいいから昔はそれが普通だつた」(④ 126～127)。吉田は東京の神保町にあるランチョンというピヤホールの常連であつた。

昭和初期における日本とヨーロッパとの融合は、街並みや建物だけに生じたものではなかつた。むしろ吉田は、明治期に「実用的なこと」の陰に隠れて「無用のもの」とされた「精神の面でのこと」の意義が(⑥ 138)、昭和初期に再発見されたことを強調している。

『東京の昔』の古木君は、東京帝国大学の仏文科の学生である。仏文科の学生であるということについて、『東京の昔』の語り手は英語・英文学と対比しながら、次のように言う。「英国の文学

というのは英語と結び付いて英語の実用的な性格から尊重されはしてもフランス文学は単なる文学であつて文学は一般に用がないものだつた」(⑥ 120)。語り手によれば、大正以後の日本では「外国語と外国語で書いたものの研究のいわば商業上の価値」は「それを学校で教える機会の有無」で決まつたが、「その頃はフランス語で書いたものの研究をやる学校が東京と京都の両帝国大学以外に殆どなかつた」ため、「そこを卒業してもフランス語の先生に就職出来る所がなかつた」(⑥ 47)。

それでも古木君が仏文科の学生であつたということは、「フランス語で書いたものを読むのが好きでこれを専攻していた」ということである。ここで語り手は、昭和初期の大学生について次のように言う。「当時も就職が目的で大学に行つたりするのに陸(ろく・引用者補)な人間はいなかつた」のであり、「もともと大学に行くものが今日の半分もいなかつた」こともあつて、「その頃はそういう陸でなしが今よりも少かつたことは確かである」。したがつて、「大学生は学徒だつた」(⑥ 47)。

古木君のような大学生だけでなく、昭和初期には好きでフランス文学を読む人間が現れていた。語り手は言う。「それだから銀座の紀伊國屋を繁盛させたフランスの本の人氣は本ものだつた」。「銀座の町そのものが同じく当時の世俗的な考えから浮き上つたものだつたからやはり本ものだつた」。「立身出世に国威発揚はそこでは意味をなさなかつた」(⑥ 120～121)。「フランス語の本が当時はドイツ語や英語のと違つて立身出世と縁がないものだつたからそれが読みたいものだけに争つて買われてそれで本らしい役目を果たしていた」(⑥ 47)。

そして、銀座にパリの喫茶店があつて不自然でなかつたように、銀座でフランスの本を読んでも不自然ではなかつた。語り手は言う。「コクトーでもエティアンブルでもの新刊書から眼を上げて服部時計店の天辺にある時計を見てもただ本屋の店先を冷やかしている感じしかしなかつた」(⑥ 47)。

吉田によれば、「明治、大正の時代」には『罪と罰』を手本に『破戒』が書かれ、「ユイスマン

スとイブセンがごっちゃに崇められていた」。それに対して吉田は、「日本でのヨオロッパの近代文学との接触」は昭和初期に始まったと述べ、ヨオロッパの近代文学を知って日本の文学も「明治以後始めて文学の名に価するもの」になったと述べている (① 245)。

ここで吉田がいうヨーロッパの近代文学とは、世紀末の文学のことである。吉田によれば、日本がヨーロッパと出会った19世紀の後半、すでにヨーロッパの世紀末は始まっていた。しかし、「大きな(中略)決定的な事件はその具体的な形を取るまでに時間が掛る」のであり、「世紀末とともに展開したヨオロッパの近代」が「一般のものに眼に近代として映えるようになった」のは第一次世界大戦後のことである。こうして昭和初期の日本で、ヴェルレーヌやマラルメやラフォルグやイエーツヤリルケが (① 197)、またジイドやヴァレリーやブルーストヤラディゲヤコクトーが親しまれるようになった (① 245)。『東京の昔』の語り手によれば、「昭和に入る頃から漸く変動を通して営まれて来た生活が精神の面でも芽を吹き始めた」のである (⑥ 138)。

語り手はまた、銀座ではその頃から「洋服の普段着」が「板に付く」ようになり、「それが板に付いたものだったから明治以前の服装に、又詩は日本の詩歌に繋がった」と言う (⑥ 138～139)。銀座の喫茶店の裏に江戸時代からの掘り割りがあったように (⑥ 52)、フランス象徴派の詩が読まれる背後には日本の詩歌の伝統があったのである。吉田はヨーロッパの世紀末の象徴主義について論じながら、「このようなことは東洋では古くからの知識であって、例えば日本や支那の文学から象徴主義を取り去るならば後に殆ど何も残らないことになる」と述べている (① 204)。

昭和初期の日本がヨーロッパの近代に親しむことができた背景には、明治以降の動揺が一段落を告げ、江戸時代までの文明が息を吹き返したことがあったと考えられる (① 243)。『東京の昔』の語り手は、「もう明治から三代目が出て来る頃でしょう」と言い (⑥ 222)、同じく『東京の昔』の川本さんは、「外国人が人間に見えて来た時に

明治維新の仕事が完成するんじゃないですかね」と言う (⑥ 179)。昭和初期の日本が、日本の伝統と融合させながら世紀末のヨーロッパを受け入れたとき、人間が人間に見えたのである。

なお、吉田は世紀末のヨーロッパと世界との間に、また世紀末のヨーロッパとヨーロッパ内の各国・各地域との間に、「普遍性と個別的であることとの関係」を見出したが、その関係を吉田は、日本と日本の各地域との間にも見出している。『絵空ごと』の元さんは、「日本、日本で言うけれど、そういう話を聞いていると日本中どこへ行っても同じだっていう風にとれて実際には地理的にも日本のように変化が多い国は他にないでしょう」と言う (④ 35)。同じく『絵空ごと』の勘八は、ある日本の町について、「余り何も目立つものがないのでただどこかの或る町に来ているという感じしかない」が、しかしそれは「どこでも構わない」のではなく、「間違いなくその或る町」であると言う (④ 44)。

2-5 日本における近代の終焉

『絵空ごと』の戸塚さんは、昭和初期を「天下泰平の文明の時代」であったと言う (④ 26)。『東京の昔』の語り手も、昭和初期の「天下泰平の気分」に触れ、「泰平が必ず文明の時代でのことならばその頃は、(中略)日本も文明だった」と言う (⑥ 115)。

しかしこの時期は、同時に「危機の時代」でもあった。『本当のような話』の中川は昭和初期のことを思い出して、「今は何を見ても危機だとその頃横光利一が書いていた」と言う (③ 178)。そして中川は、「もし危機というのが(中略)軋轢でもあるならば日本にあった危機が正真正銘のものだった証拠にその軋轢の方も不足することはなかった」と振り返って、満洲事変・上海事変・五・一五事件、二・二六事件、盧溝橋事件を挙げ、「二・二六事件が起った年にヒットラーがドイツ軍をライン地方に進駐させている」と付け加える (③ 181)。

吉田は『本当のような話』の中で昭和初期につ

いて、「その頃は中川も近代という言葉を使った」と記している(③180)。昭和初期に「近代」をヨーロッパから受容した日本は、近代の終焉へ向かう「危機の時代」をも、ヨーロッパとともに歩むことになったのである。中川によれば、「世界的に危機があった」のが近代であり、「日本にもあった危機が世界的なものの一部だったこと」は、「日本で外国のものをそのまま受け取ることが出来たということ」であった。中川は、「それでコーヒーしか出さない店もコロンバンも説明が付くかも知れない」と言う(③180)。

ヨーロッパの危機がそうであったように、日本の危機も「精神の危機」であった(③179)。そしてヨーロッパにおける精神の危機がそうであったように、日本における精神の危機も「自意識」の孤絶化に起因するものであった。中川は戦後になって危機の時代を回想して、「自意識という前の時代に開発された遺産」を思い出し、その時代には「無意識の営みである筈のものが極めて意識的に築かれていかなければならなかった」ことを記憶によみがえらせる(③187)。

ただし吉田は、ヨーロッパと日本の近代の間の、いわば段階の違いにも言及している。『東京の昔』の語り手は昭和初期の「天下泰平」に触れながら、普通はそういうことになるのは「一つの文明がその絶頂にある時」であるが、「昭和の初期の日本が(中略)その絶頂に達していたとは思えない」と言う(⑥115)。語り手はまた、1930年代の Пари は「フランスでの一つの爛熟期を示すもの」であったが、その頃の東京は「そのような状態になかった」と言う(⑥213)。

語り手によれば、その頃「世界の動き」が「一つの行き詰りに来ている印象」を与えた中で、日本には「動きがある感じ」がした(⑥202)。日本の近代は、まだ若かったのである。そして語り手は、「それが新しくてまだ脆弱なものだったから(中略)これは見守るに値したのでその均衡がいつ破れるか解らないのを覚悟しなければならなかった」と言う(⑥115～116)。

『東京の昔』の川本さんは、「世界に雄飛するなんていうがりがりした感じのこと」について、

「がりがりするのが随分続きましたからね。もう又春の野原で摘み草するのに戻っていい頃ですよ」と言う。それに対して古木君は、「その前に満州の経略だとかどことかの市場に進出するとかいうことをやるんじゃないでしょうか」と答え(⑥221)、同じく『東京の昔』の勘さんは、「戦争が始まりますかね」と言う(⑥224)。語り手は戦後になって回想する。「その頃古木君と歩いた銀座」が、10年後には「そうして歩けるような場所」ではなくなったことを(⑥115～116)。

おわりに

昭和初期に『東洋経済新報』の三浦鏡太郎は、西洋の産業と日本の「固有産業」とが融合して「新固有産業」が生まれていると論じ、その例として染織・雑貨・陶器・漆器・自転車等を挙げた(土川信男「政党内閣と産業政策 一九二五～一九三二年(一)」<『国家学会雑誌』第107巻第11・12号、1994年>34～35頁)。三浦の議論は、昭和初期の日本が日本の伝統と西洋の近代とを融合させて日本の近代を生み出したという吉田の見方と符合する。

ちなみに『東京の昔』の勘さんは自転車屋で、自転車の改良に熱心に取り組む。『東京の昔』の語り手は勘さんの自転車を見て、自転車は「既に日本のもの」であり、それが「東京の道端の電信柱に立て掛けてあっても」おかしくないと思う(⑥162)。日中戦争が始まる頃、日本の自転車は「立派な輸出品」となっていた(加藤陽子『戦争まで』<毎日出版社、2016年>56頁)。

筆者は昭和初期の政党内閣政治について研究している。政治史的にはその時期に、「政党内閣期」が現出した。筆者は、従来「大正デモクラシー期」と「ファシズム期」との過渡期とされがちであった政党内閣期を、一つの独立した時代として捉えたいと考えている。そのような筆者にとって、吉田の見方は興味深いものである。

もっとも、吉田の大正期に対する極端に低い評価には、筆者は戸惑いも覚える。しかし、先述したように吉田は、明治以来の日本人の営みが昭和

初期になって新しいものを生み出したとも考えている。そこには、大正期に西洋の議会政治・政党政治を消化しようと試行錯誤した結果、昭和初期に日本流の政党内閣制が生まれたと考える余地もあるのではないか。

一方、世界のグローバル化という観点から吉田の議論を振り返ると、そこで示された「普遍性と個別的であることとの関係」が注目されるであろう。吉田は、18世紀にヨーロッパらしさを獲得すると同時に文明に到達したヨーロッパが、19世紀に世界に拡大した結果、文明とヨーロッパ自身を見失い、その後、世紀末のヨーロッパが文明を取りもどすとともにヨーロッパらしさを再発見したと考える。

吉田は、アメリカが超大国となった戦後についても、次のように述べている。アメリカという「まだ必ずしも文明の域に達していないもの」に、科学と民主主義という「お株を奪われた」ことが、「ヨーロッパにただヨーロッパしか見ない」ことを容易にしている(① 247)。また、「ヨーロッパが再びヨーロッパになっただけでない(中略)ヨーロッパ以外の世界が始めてヨーロッパというものを見ている」(① 250～251)。ここには、グローバル化の進展に対処しようとす

る日本に対して、示唆するものがあるように思われる。

引用・参考文献

- 吉田健一『乞食王子』講談社文芸文庫、1995年。
同上『日本に就て』ちくま学芸文庫、2011年。
同上『ヨーロッパの世紀末』岩波文庫、1994年。
同上『ヨーロッパの人間』講談社文芸文庫、1994年。
同上『本当のような話』講談社文芸文庫、1994年。
同上『昔話』講談社文芸文庫、2017年。
同上『絵空ごと・百鬼の会』講談社文芸文庫、1991年。
同上『英国の近代文学』岩波文庫、1998年。
同上『東京の昔』ちくま学芸文庫、2011年。
同上『時間』講談社文芸文庫、1998年。
同上『東西文学論・日本の現代文学』講談社文芸文庫、1995年。
同上『父のこと』中公文庫、2017年。
苅部直『秩序の夢』筑摩書房、2013年。
同上『「維新革命」への道』新潮選書、2017年。
三谷太郎『人は時代といかに向き合うか』東京大学出版会、2014年。
加藤陽子『戦争まで』毎日出版社、2016年。
土川信男「政党内閣と産業政策 一九二五～一九三二年(一)」『国家学会雑誌』第107巻第11・12号、1994年。

《Summary》

YOSHIDA Ken'ichi's View on "the Modern Period" of the History of Europe and Japan

TSUCHIKAWA Nobuo

YOSHIDA Ken'ichi was a literary man, a critic and an author whose Father was Yoshida Shigeru, a prime minister during post-war Japan. Yoshida Ken'ichi's view on "the modern period" of Europe and Japan is unique compared with the common understanding of the term. By the term Yoshida refers to "the end of the 19th century" in Europe and "the early Showa period" in Japan. This article intends to examine Yoshida's concept of modernity and its position in the history of Europe and Japan.

Yoshida insists that Europe attained civilization and found Europe itself in the 18th century, then lost the former and lost sight of the latter in the 19th century. Later, at the end of the 19th century, Europe regained the former and rediscovered the latter. This view seems to be suggestive for Japan and the world in the era of globalization.

Yoshida also insists that pre-modern Japan paradoxically owned modern civilization, then lost it during Meiji and Taisho Japan, and then re-owned it in early Showa Japan. This view is interesting to the writer of this article who intends to re-evaluate "the party-cabinet period" of early Showa.